

王安憶『長恨歌』—— ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を中心として

杉江 叔子

1. はじめに

王安憶（1954年～）は、現在の中国文学界を代表する上海在住の女流作家である。

本稿で扱う『長恨歌』は、雑誌『鍾山』に1995年第2期から第4期まで掲載された、王安憶の長篇作品の中でも、最も力を入れて創作した代表作であるとされており、2000年には第五回茅盾文学賞を受賞した。その時代は、抗日戦争が終わりを告げ、解放直前の1945年から始まり、1986年主人公・王琦瑶が殺されるところで幕を閉じる。『長恨歌』に関する日本での先行研究は、阪本ちづみ、劉怡、中森志乃¹のものがあるが、あまり多くはない。これに対して中国での王安憶に関する先行研究は日本よりはるかに多く、最近の傾向としては、王安憶を「都市を描く作家」として論じるか、王安憶の「作家としての姿勢」について論じる研究が多い²。特に『長恨歌』に関しては、王安憶の描く上海の弄堂は、上海の象徴であり、その弄堂の象徴が王琦瑶であるという考察が主流であり、李欧梵は、特に王安憶の作品の中でも『長恨歌』を高く評価し³、上海という都市を舞台に描いたら王安憶に勝る作家はいないと述べている。いずれの論文も、王安憶の上海への執着は、いわば前提として論じはじめている。

本稿では、王安憶の上海への愛着を場所愛⁴の概念からまず検討する。その上で、王安憶自身が言及している『長恨歌』へのユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を、同様にある都市への場所愛をキーワードとして読み解いてみたい。なお、本稿で引用する『長恨歌』の邦訳は筆者による。原文は、南海出版公司『長恨歌』2003年8月第1版を使用する。

2. 王安憶と上海

王安憶は、54年に南京で生まれたが、母の転属に伴って55年には上海に移

住した。王安憶はこれまで、故郷である上海、下放のために約2年間生活した安徽省淮北農村、文芸工作団の楽隊員として約3年間生活した江蘇省徐州地区、この三ヶ所での暮らしを経験した。中でも、徐州の生活は、都市に出かけたり農村に出かけたり移動が多かったが、比較的都市に出かけることが多かったという。しかし、安徽省淮北農村の農場での体験は、王安憶にとっては非常に過酷なものだった。その当時を「わずか二年半、しかもそのうちの半年ほどは家に帰ったりしていたが、そこでの生活は十年にも二十年にも感じられた。私にはほかの多くの人のように、下放生活をあたたかい気持ち、懐かしい思いで書くことがどうしてもできず、農村をエデンの園に描くことができなかつた」⁵と回想している。

そして、「もし、私もそこ(筆者注：安徽省淮北農村)に戻ったら、おそらく涙がでるでしょう。そこでの生活は私の人生で最も暗く、私は(筆者注：そこに)戻る原動力もなかったのです。」⁶と発言している。当時、わずか16歳だった王安憶にとって農村での生活が二度と忘れることのできないほどの苦しい体験であったことを推測することができる。

王安憶の初期の作品を批評した葛城明子、荒木猛の「王安憶作品研究」⁷では、「王安憶が生活というものを意識するようになったのが、農村に行ってから、生活の中に美しいものを認めることができるようになったのは、文工団へ行ってからであり、その生活体験を『小院瑣記』に綴った。(筆者注：文工団を離れて)上海へ帰ってから、生活の中に美しいものを求めようとして書いた作品が、さしずめ『雨、沙沙沙』であると指摘している。葛城、荒木が述べるように、王安憶にとって、上海を離れたこと、そして下放先での過酷な体験をしたことにより、上海という場所が今までよりももっと思い出が詰まった「親密な場所」となり、上海という場所への愛がうまれた。つまり、自分自身を全く違う環境に身を置いた経験が、過去の大切な経験と結びつき、自分の生活体験を作品に表したのであろう。葛城、荒木はさらに、王安憶自身が『感受・理解・表達』の中で語った「この作品(筆者注：『雨、沙沙沙』)を書くよう促したのは、主にやはり生活の中であって心に感じるものだった。」⁸を引用している。

王安憶の上海に対する場所への愛は、『長恨歌』の中でも見ることができる。

(筆者注：郎橋の地で目にした)龍虎商標の萬金油のポスターは上海から来たもの、美人画の月份牌〔カレンダー〕も上海の産物、雑貨屋には上海

の双妹商標のオーデコロン、老刀商標の煙草、上海の歌は、鄔橋の人も口づさむことができる。気にしなければそれまでなのに、いったん意識し出すと、これらのこまごましたものが王琦瑤をたきつけた。王琦瑤の心はこれ以上耐えることはできなかつた。鄔橋のどこにいても上海のよびかけが聞こえてくるようになった。(『長恨歌』 P132)

『長恨歌』の中で、李主任との突然の死別の傷心癒えない王琦瑤は、上海を離れ、鄔橋の親戚宅に一時期、身を寄せる。王琦瑤にとって、上海という都市は辛い経験をした場所であったのに、上海を離れてまもなく上海に対する懐かしい思いがこのようにわきおこり、どうしてもその強い上海に対する思いを抑えることができなくなってしまう。これは、上海に戻る直前、王琦瑤が上海を想った心境に重なる。

彼女(筆者注：王琦瑤のこと)は日めくりを一枚めくった。上海も歳をとったのだ。上海は本当に思うに想えず、想えば心が痛むのだ。そこでの毎日には、限りないよしみがある。…… [杉江略] ……上海は本当に不可思議な場所であり、その光り輝く姿は人に一生忘れさせることはない、すべてが過去になり、泥、灰に変化し、ヤモリに変化しても、その輝き続ける光は、ずっと照り輝いている。(『長恨歌』 P131)

王安憶は、上海は世間でよく言われるような華やかなイメージがあるだけでなく、実務に励む都市で、上海の小市民の生活は決して贅沢ではないが、人びとが生活していくための衣食には事欠かない都市である⁹と述べている。そして、上海で育った王安憶は、20、30年代のモダン都市、魔都として小説や戯曲、映画などのメディアで語られてきたオールド上海の時代に対して懐旧の幻想など抱いてはいない。中華人民共和国成立後の1954年に生まれた王安憶は、現代上海へと向かった時代を駆け抜け生きてきた。そして、時には悲観的に上海を傍観することもあった。

20、30年代の昔の夢に対し懐旧の情を抱いていけません、あれは舞台の灯火にすぎず、幕の後ろはぎゅうぎゅう詰めの蜂の巣や蟻の穴のように、中に潜んでいるのは、歯ぎしりしながら、手ぐすね引く決心であります。この場所にはほんとうにどれほどの詩情があると言えるのでしょうか、歌はある種の地突きの作業歌なのです。¹⁰

『長恨歌』は、壮大な上海の風景である弄堂の描写から始まる。一見、上海

の弄堂に生きる、主人公・王琦瑶の一生を綴っている物語のように見えるが、王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶を90年代以降、取り壊しが進む上海弄堂の象徴としてとらえ、上海の隠喩としての役割を担わせ、都市・上海の変遷を描き出した。王安憶は、王琦瑶が殺された直後の弄堂をこのように描写している。

新しいビルが聳え立つ上海の中であって、こうした弄堂はまるで沈没した一艘の船のようだ、海水が引いた後のただの残骸である。(『長恨歌』P349～350)

王安憶は、旧き上海への懐旧の幻想を抱くこともなく、今の上海の文化に対しても深刻な危機感さえ持っている。しかし、王安憶は『長恨歌』以降の作品においても、小説の背景として上海を選ぶことが多く、上海を書き続ける。これは、彼女の上海に対するトポフィリア、場所愛そのものなのだと思う。上海へのトポフィリアは王安憶の作家活動の中で、不変の確固たる精神となった。さらに『長恨歌』において上海を描く際には、ユゴアの『ノートル=ダム・ド・パリ』に大変影響を受けた。

3. 『長恨歌』と『ノートル=ダム・ド・パリ』

王安憶は、ユゴアの『ノートル=ダム・ド・パリ』について、「非常に詳細に、非常に多くを描写している作品である。」¹¹と述べ、この作品を非常に高く評価している。

実際、長恨歌は誰に似ているのかと言うのなら、それは本当にほんの少しユゴアがパリを描いたのをまねているのです。私は『ノートル=ダム・ド・パリ』が大好きで、特に好きなのは、パリを高い建物の上に立って見る場面で、それはそんなに長いものではないけれど、描写が非常に素晴らしく、それは広々として雄大な様子で、ロマンチックなのに、人びとは本当にユゴアのことなど思いもしないのは、今の人はユゴアの『ノートル=ダム・ド・パリ』を読まないからです。¹²

王安憶は、『レ・ミゼラブル』の解説の中でもユゴアが描くパリを、「ユゴアは非常にパリにほれこんでいて、彼のパリの描写は非常に美しく、非常に雄大で、この都市の性質を描き出している。ユゴアが描いたパリは、なんと素晴らしいのだろう。」¹³と絶賛している。小説とは人物を書くが、人物には背景が必要であると、背景を非常に重視してきた王安憶らしいコメントである。王安憶

はかつて復旦大学で「小説学」と題する講義¹⁴を半年間担当したことがある。その講義の中でも、ユゴアの『ノートル=ダム・ド・パリ』を取りあげた。このことから、王安憶が『長恨歌』を執筆するにあたり、ユゴアの『ノートル=ダム・ド・パリ』に大きな影響を受けたと考えられる。本稿では、まず、弄堂とノートル=ダム大聖堂がそれぞれの存在する都市、上海とパリにおいて果たす役割とその性質について考察し、続いて、『長恨歌』と『ノートル=ダム・ド・パリ』それぞれの主人公が担っているその都市を代表する建物の隠喩としての役割について分析していきたい。

3.1 小市民の生命、弄堂と聖母マリアたる ノートル=ダム

王安憶は、ユゴアの描く都市の細緻な描写に感銘を受け、ユゴアが『ノートル=ダム・ド・パリ』の中で、「ノートル=ダム」と独立させて章立てをし、ノートル=ダム大聖堂を描いたように、王安憶は『長恨歌』の中で、同じように「弄堂」を一つの章に独立させて弄堂を描いている。『長恨歌』の舞台は上海弄堂であり、弄堂は上海人の代表的な居住空間である。王安憶にとって弄堂は、上海という都市の背景そのものである¹⁵。

弄堂とは北京でいう胡同、路地の意味である。北京の伝統的な家屋である四合院に対して上海は里弄¹⁶、北京のいくんだ路地、胡同に対して上海は弄堂という。上海弄堂は、小刀会の上海懸城占拠、太平天国軍による蘇州、南京の占領によって、租界に逃げてきた避難民を受け入れるために建築された。そして、そこに暮らす人びとの需要に応じて、さまざまなタイプの弄堂がうまれた。つまり、弄堂は上海という都市の生命、そして拠り所でもあり、上海というこの都市が存在し発展することのできる基礎になっている。

一方、ノートル=ダムとはフランス語で「われわれの貴婦人」という意味で、これは聖母マリアのことを指す。つまり、ノートル=ダム大聖堂とは、聖母マリアに捧げられた聖堂なのである。ノートル=ダムといえば、フランスの代名詞のようにになっているが、ノートル=ダムという名前がつかなくても、ゴシック大聖堂の全てはノートル=ダム、聖母マリアに捧げられているのである¹⁷。そして、ノートル=ダム大聖堂は、外敵から守る構造をしており、罪人に至っては、そこに逃げ込むことができれば法律の手から逃れることができる¹⁸、罪人のための避難所でもあった。ノートル=ダム大聖堂は12世紀から14世紀にほぼ200年かけて建造された、一定の時代の形式を持たない「雑種の建築」¹⁹である。

聖母マリアに捧げられるために建造されたノートル＝ダム大聖堂は、パリの中心であり、パリの魂、パリの誇りであり、同時に、パリの人びとに見られる事物としての対象であった。

王安憶は、弄堂は壊れ果てているのに、『長恨歌』の中で、私がなぜ弄堂をこんなにも華麗に描いたのかというと、弄堂は上海の典型的な居住地、大部分の市民はここで生活し、王琦瑤の中流家庭のような人びとがここで生活している、彼らこそが、我々が小市民²⁾と称する人びとであるからだ²⁾と述べている。『長恨歌』の冒頭において弄堂は次のように描写される。

高い見晴らしの利く場所に立って上海を眺めると、上海の弄堂は壮大な風景である。それは(筆者注：弄堂)この都市の背景と同じである。通りと建物は弄堂からつき出ている、これは点であり線である。しかし弄堂のほうは中国画の山や岩を描くのに用いるタッチで、空白をいっぱいうめている。(『長恨歌』P3)

このように俯瞰する視点から描くことによって、弄堂が上海という都市を辺り一面に埋め尽くしている様子がわかる。これは、ユゴーが「パリ鳥瞰」の章において、大聖堂の塔の頂からの15世紀の美しいパリの眺めを俯瞰する視線を通して、眼の下に拵がり集められた事物としてのパリを綿密に描写したことからの影響による。外面がどんなに朽ち果てようとも時代を乗り越えて、これまで生きてきた弄堂は、90年代に入って時代遅れの象徴として消えつつある。王安憶は、弄堂の外面がどんなに変化しても弄堂の内なる精神は変わらないと叙述した。弄堂は1860年代末から1870年代にかけて建築が始まり、その後、様々なタイプの弄堂が存在し、歴史のあらゆる変化を、そこで生活してきた多くの小市民と共に経験してきた。王安憶は『長恨歌』の中で、弄堂の変わることのない内なる精神を描き出そうとした。それは、変化する上海の中にある不変の存在である、それぞれの異なる弄堂で日常生活を営む小市民を描くことである。つまり、上海という都市にあって、弄堂は小市民と一体なのである。上海の弄堂には、それぞれ異なった表情や声があり、小市民の生活の中であって、小市民と共に感動も共有する。さらに王安憶は、弄堂には人間と同じように身体感覚器官もあり、冷たさや暖かさを感じ取ることができるという。

上海の弄堂は性的な魅力があり、男女の間のような親密さがある。実際に触れてみると冷たさと暖かさをもっており、それは感じ理解することが

でき、そこにはある種の私心がある。(『長恨歌』 P5)

とりわけ、平安里の古い弄堂を例にとっても、どうして倒れないのか驚くだろう。……〔杉江略〕……弄堂は形がばらばらになっても、精神はばらばらにはならず、押さえつけられている心の声がある。この心の声は、この都市の騒ぎで沸き返る中であっては、たいしたものではない。……〔杉江略〕……この心の声は何だろう。それは二文字“活着”〔生きている〕ということだ。(『長恨歌』 P322)

王安憶は弄堂の庶民的な風景の中に生きる人びとを『長恨歌』の中で描き出した。ヒロイン王琦瑶は、李主任に与えられたアリスアパートでの愛人生活、李主任と死別して傷心を癒すために上海を離れて暮らした鄔橋での生活以外、人生の大半を上海弄堂で過ごした。

王安憶はノートル＝ダム大聖堂を、「多くの打ちこわしや改革を経た後でも、こんなにもたくさんの時間の試練を経ても、ノートル＝ダム大聖堂はまるで一本の大木のように、葉っぱは毎年、すべて落ちてしまっても木の幹は永遠なのです。」²と形象した。ノートル＝ダム大聖堂が、時代の変遷を経て外見がめまぐるしく変わろうとも、内なるものは変わらないという点に、王安憶は上海の弄堂を重ね合わせ、『長恨歌』を描く際に、ユゴアの描くノートル＝ダム大聖堂の描写に影響を受けたのではないであろうか。

3.2 王琦瑶とカジモド

次に、王安憶が描いた『長恨歌』の弄堂で暮らす王琦瑶と、『ノートル＝ダム・ド・パリ』のせむしの鐘番・カジモドの作品の中で果たす役割について分析していきたい。

『長恨歌』は、冒頭の「弄堂」に始まり、「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」という描写の後に、主人公・王琦瑶が登場する。

王琦瑶は典型的な上海弄堂の女の子だ。毎朝、弄堂の裏口がガタンと開くと、そこに模様のついたかばんをさげているのが王琦瑶である。午後、となりの蓄音機にあわせて、「四季調」を口ずさんでいるのが、王琦瑶である。連れだって映画館でヴィヴィアン・リー主演の「風と共に去りぬ」を見に行くのが、王琦瑶たちであり、写真館に写真をとりに行くのが二人の特別に仲良しの王琦瑶である。どの**厢房**〔“正房”（母屋）の前方の両側

の部屋]、又は亭子間 [上海の二階建て住宅の中二階にある部屋] のどこにでも王琦瑶は坐っている。(『長恨歌』 P19)

注意しなければならないのは、この章で登場した王琦瑶は固有名詞ではないということである。ここで描かれている王琦瑶は、上海の弄堂なら誰もが目にすることができる典型的な上海弄堂の女の子であり、上海の雰囲気である。この物語の主人公である王琦瑶が、ごく普通の家庭の出身、典型的な上海の弄堂ならどこにでもいるような女の子であることを強調するために、王安憶は上海の生活空間である「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」に続けて、上海の雰囲気として「王琦瑶」という章をもうけた。劉怡は、王琦瑶を上海の「典型的な上海弄堂の娘」に設定したのは、恐らく彼女に「都市の換喩としての女性」という役割を担わせているためである²³と述べている。王琦瑶は上海そのもの、王安憶の心の上海であり、大きな目標の決意にあたっては妥協することなく、目の前に道がなくとも生きていく道を探して歩いていくことができる²⁴人物として描かれている。

そんな王琦瑶であったが、60年代の程先生の死は、同じ時代の理解者の消失、つまり、新しい時代を一人で生きていかなければならないことを意味した。40年代、古き時代の上海小姐だった王琦瑶は、80年代に入り、恋人であった老克腊には共に生きていくことを拒否され、物語の最後では長脚に殺されてしまう。上海という都市は、王琦瑶にとって愛すべき場所であったのに、王琦瑶は今の上海を生きる若者たちとともに生きていくことができなかつたのである。90年代へと向かう時代、上海も古い時代から新しい時代への容赦ない変革を経験し、王琦瑶も暮らした小市民の住処であり、上海の形象であった弄堂は、旧上海の時代遅れの象徴として次々に取り壊されていくこととなった。王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶の生きる時代の終わり、王琦瑶の死を、上海弄堂の消失に重ね合わせ、主人公・王琦瑶の身体を通して上海という都市の経験を表象したのである。

一方、王安憶は『ノートル＝ダム・ド・パリ』の精神世界の構造²⁵にも注目し、その精神世界を、朽ちた世界、現実の世界、神の世界の三つに分類した。王安憶は、第一の朽ちた世界とは衰亡の世界、まさに人間の権力社会であるとし、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の登場人物では聖職者クロード・フロロが属する。第二の現実の世界とは、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の中で、最も旺盛な

生命力をもっている市民集団がここに属し、この代表的人物こそ、エスメラルダに命を助けられた詩人ピエール・グランゴワールが属する。第三の世界、現実の中では愛情という名の永遠なる神霊の世界には、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の主人公であるせむしの鐘番カジモドと、孤児である魅力的なジプシーの娘エスメラルダが属するのだと解釈した。さらに、彼らの中で本当のノートル＝ダム大聖堂の美しさを理解しているのはクロード・フロロとカジモドであるが、クロード・フロロは虚無の世界にあり、この世界の周縁にあつて足を踏み外して落ちてしまったために、もう一人のカジモドこそ、ノートル＝ダム大聖堂の本当の美しさを理解しているのだと指摘する。そして、カジモドとノートル＝ダム大聖堂とのその深い関係は、カジモドの精神がノートル＝ダム大聖堂の美に引きつけられているために成り立つのである²⁶と論じた。

パリの民衆は、カジモドからは一種の不思議な放射物が出ていて、それがノートル＝ダムのすべての石に生気を与え、この古い大聖堂の奥まった場所を息づかせているらしいと噂した。カジモドがこの聖堂に住んでいるのを知っただけで、回廊や正面玄関にある無数の彫像が生きて、動いているように見えてきた。事実、彼の手にかかると、この大聖堂も、おとなしい、すなおな生き物みたいにみえてくるのだった。大聖堂は彼の命令を待って初めて大声をあげた。大聖堂は、ちょうど守り神につかわれているみたいに、カジモドにとりつかれ、満たされていた。彼がこの巨大な建築を息づかせているのだ、とも言えそうだった。じっさい、彼はこの建物のどこにでもいた。建築のあらゆる場所に神出鬼没に現われた。(『ノートル＝ダム・ド・パリ』 P157)

エスメラルダはクロード・フロロの策略にはまり死刑に処せられることが確定したが、カジモドは、自分が清らかな愛情を抱くエスメラルダを何とかして助け出したかった。エスメラルダが死刑台まで引きまわされる途中、ノートル＝ダム大聖堂の境内に逃げ込むことだけが、彼女の生命を助けることができるたった一つ方法であった。なぜなら、「大聖堂は安全地帯であり、人間のあらゆる裁きの手は、この敷居の上では、すべて消え去ってしまう」(『ノートル＝ダム・ド・パリ』 P353) からであった。ノートル＝ダム大聖堂は、避難民を受け入れるための住居でもあった弄堂と同じ、罪人のための避難所であったのである。『ノートル＝ダム・ド・パリ』の最後は、鐘番のカジモドが彼女を救おうとする努力もむなしく、エスメラルダはクロード・フロロの策略によって絞首刑

に処せられる。悲嘆にくれるカジモドは育ての親のクロード・フロロを殺し、そして自らモンフォーコンの納骨堂に赴き、エスメラルダの死骸を抱いて死ぬという結末で物語は終わる。ユゴーは『ノートル＝ダム・ド・パリ』で、カジモドが死んでしまった後のノートル＝ダム大聖堂をこのように描写した。

こんなわけで、カジモドがここに住んでいたことを知っている者の目には、今日のノートル＝ダムは、さびれた、活気のない、死んでしまっているような場所にみえるのだ。何か歯のぬけたようなさびしい感じがする。この巨大な肉体はからっぽなのだ。骸骨なのだ。魂がとび去って、ぬげがらだけが残っている。ただそれだけなのだ。目がおさまっていた穴はまだ残っているが、もうまなざしというものを失った、されこうべみたいなものなのだ。(『ノートル＝ダム・ド・パリ』P158)

王安憶はユゴーが描写した、第三の世界に属するカジモドとエスメラルダこそ、完璧な美しい人物であり、彼らには時代を超えた豊富な内包があると主張する。彼ら二人は平民生活の最も低層にあり、人物自体に複雑な思想があるわけでもなく、自分の運命を自覚しているわけでもないが、この二人の人物が属する第三の世界、すなわち神の精神世界、永遠の世界にこそ、ユゴーの思想となる材料が注がれているのだ²⁷と解釈した。つまり、ユゴーが描いたカジモドは、王安憶がいう愛という名の神霊世界、永遠の世界そのものであり、ノートル＝ダムの守護霊、この大聖堂の魂であった。

新しい時代の変革によって、旧上海の時代遅れの象徴として次々に消失していく上海弄堂は、同時にそこで生きた王琦瑶の生きた時代の終わり、王琦瑶の死を意味した。王安憶は『長恨歌』の中で、鳩を上海の全てを俯瞰することができる都市の精霊として、鳩の視点から見た上海弄堂の景観を描写している。これは、ユゴーが『ノートル＝ダム・ド・パリ』の中で、パリの人びとに見られる事物としてのノートル＝ダム大聖堂を、パリを眺めることができる塔の頂に視点を行きかせ、パリの景観を描いたことからの影響である。王安憶は鳩を、「この都市の最も奥深く隠れて現れることがない罪と罰、禍と福、すべて彼ら(筆者注：鳩)の目をごまかすことはできない。」²⁸、この無神論の都市にある神の全知全能²⁹として、鳩だけに、王琦瑶の最後の息をひきとるその瞬間までを見届けさせたのである。³⁰

注

- 1 阪本ちづみ 1998 年は、『長恨歌』のストーリーをたどり、一人の女性と上海という都市の四十年間を、王安憶の策略、意図を通して分析することを試みている。劉怡 2002 年は、王安憶が『長恨歌』を、上海という都市が多くの人びとに自由と解放の空間を与えてくれる都市であるという認識の上から、「女性」「都市」といったテーマを中心に創作したと考察している。中森志乃 2001 年では、中国の最先端をいく都市上海の近代の歩みに対する悲劇的な視点から『長恨歌』は描かれ、王安憶は代表的な上海のイメージである「オールド上海ノスタルジー」という幻想を否定し、現在、拡大し周縁化していく上海の荒廃に警鐘をなげかけているのだと解釈している。
- 2 「都市を描く作家」として論じられているものには、王干 1998 年があり、王安憶の『長恨歌』を「老城叙述者〔古い都市を叙述する作家〕」としての代表作であると位置づけ、一人物を通して一都市を描くことは、一人物の精神が一つの都市の精神に反映することだと考察している。「作家としての姿勢」については、陳思和 1998 年の他、先行研究は多数ある。
- 3 李欧梵 2000 年 P129～P139。
- 4 トポフィリアという言葉は、日本語で「場所愛」と訳される。地理学者イーファー・トゥアンの地理学の概念を一言で表しているのがトポフィリア〔場所愛〕である。トゥアンは、ある場所に対してまるで一目ぼれのような体験をし、これが「場所愛」への探求を導き、後に地理学を志すようになった。この「場所愛」をトゥアンは「トポフィリア」“topophilia”と名づけた。この「トポフィリア」という言葉は、バシュラールが『空間の詩学』の中で「幸福な空間のイメージ」に対する自分の研究をフランス語で“topophilie”「場所愛」と名づけたのに由来する。
- 5 佐伯慶子 1989 年 P192。
- 6 深圳新聞網 2004 年 2 月 24 日。
- 7 葛城明子・荒木猛 1995 年 P147～P164。
- 8 注 7 に前掲 王安憶『感受・理解・表現』『上海文学』1982 年 8 月からの引用による。
- 9 王安憶『王安憶説』P207～P208。
- 10 王安憶『尋找上海』P85。
- 11 注 9 に前掲 P206。
- 12 注 9 に前掲 P206。
- 13 注 9 に前掲 P351。
- 14 この講義録は後に、王安憶『心霊世界 —— 王安憶小説講稿』に収められている。なおユゴーについて述べているのは「第 5 節」P110～P141 である。
- 15 王安憶『長恨歌』P3。
- 16 1860 年代末から 1870 年代にかけて盛んに建築されるようになった、上海独自の庶民用の住宅で、当時は、イギリス人に「rowhouse」と呼ばれていた。
- 17 馬杉宗夫『パリのノートル・ダム』P24。

- 18 ヴィクトル・ユゴー『ノートル=ダム・ド・パリ』P365。
- 19 ユゴーは、ノートル=ダム大聖堂を『ノートル=ダム・ド・パリ』の中で、「雑種的建築」、つまり、一定の時代の建築形式を持たない、過渡的様式の一つ、その姿は噴火獣(キマイラ)のようなものだと形象した。
- 20 王安憶は、上海でもっとも主要な居住者は小市民であり、上海という都市は小市民の実践的な生活の上に成り立ってきたのだと一貫して認識している。王安憶も幼い頃から上海の弄堂の中で育ち、小市民の魂の中で成長した。そして、王安憶本人も「小市民」という言葉を好んでよく使用する。王安憶のこれまでの言説において、この言葉を、低層、下層、中間層とその時々異なる階層で用いているが、本稿においては、王安憶はそれほどの違いをもって区別して使用しているわけではないととらえ、小市民とは、中間層に属し、都市に住む一般市民をさし、生活していくのに困る低層、下層の人びとはここには含まれないと解釈した。
- 21 2004年11月、来日した王安憶に直接、筆者がインタビューした内容より。杉江叔子2005年1月名古屋大学大学院修士学位論文『通過女主人公身体所表現出来る都市経験——王安憶「長恨歌」』。
- 22 注14に前掲P114。
- 23 劉怡2002年P155。
- 24 注9に前掲P89。
- 25 注14に前掲P130、P133、P137、P140。
- 26 注25に前掲P123。
- 27 注9に前掲P86。
- 28 注15に前掲P17。
- 29 注15に前掲P18。
- 30 注15に前掲P349～350。

参考文献

- 丸山昇『中国の都城⑤——上海物語』集英社 昭和62年10月
- 佐伯慶子「王安憶の『小鮑荘』」『中国文学論叢』第14号 桜美林大学 P187
～P216 1989年3月
- 村松伸『上海・都市と建築 1842年——1949年』PARCO出版 1991年4月
- 前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫 1992年8月
- イーファー・トゥアン著 山本浩訳『空間の経験』筑摩書房 1993年11月
- 葛城明子・荒木猛「王安憶作品研究」『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』第35巻
2号 P147～P164 1995年1月
- 阪本ちづみ「王安憶『長恨歌』——可愛的上海小姐」『季刊中国』53号「季刊中国」
刊行委員会 P69～P76 1998年6月
- 木村尚三郎『世界の都市物語 パリ』文春文庫 1998年12月
- エドワード・レルフ著 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』筑摩書
房 1999年3月

- 『月刊 しにか 上海歴史探検』第11巻第7号 大修館書店 2000年7月
和田知久、森岡優紀、上村香織、新谷秀明「中国作家紀行99 インタビュー四編・人への回帰 —— 王安憶」『野草』第66号 P50～P74 2000年8月
中森志乃「王安憶論 —— 作品分析に見る近代都市上海——」東京大学修士学位論文 2001年
劉怡「王安憶の描く上海 —— 『長恨歌』を中心に——」『人文学報』331 東京都立大学人文学会 河出書房 P143～P160 2002年3月
馬杉宗夫『パリのノートル・ダム』八坂書房 2002年6月
ヴィクトル・ユゴー著 辻昶・松下和則訳『ヴィクトル・ユゴー文学館 第五巻 ノートル=ダム・ド・パリ』潮出版社 2004年2月
王安憶『心霊世界 —— 王安憶小説講稿』復旦大学出版社 1997年12月
陳思和「營造精神之塔 —— 論王安憶 90年代初的小説創造」『文学評論』P50～P60 1998年6月
王干「老遊女金: 90年代城市文学的四種叙述形態」『広州文芸』P63～P68 1998年9月
李欧梵「当代中国文化的現代性和後現代性」『文学評論』P129～P139 2000年8月
王安憶『尋找上海』学林出版社 2001年11月
王安憶『長恨歌』南海出版公司 2003年8月
王安憶『王安憶説』湖南文芸出版社 2003年9月